日常の意味

奨励	村山 盛葦〔むらやま・もりよし〕
奨励者紹介	同志社大学神学部准教授
研究テーマ	新約聖書学・初期キリスト教

そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。

（ローマの信徒への手紙　5章3―5節）

苦労の人パウロ

今日の聖書テキストは「ローマの信徒への手紙」です。パウロというキリスト教にとってなくてはならない重要な人物が書いた手紙です。どのように重要かと言えば、彼のお陰で今のキリスト教があるといっても過言ではない、そのような重要な人物であります。現在のキリスト教は私たちが今ここで礼拝しているように日本という社会、そして全世界で信じられています。このような世界宗教の基礎を作ったグループの代表的人物がパウロです。彼がいなければひょっとしたら、キリスト教はユダヤ教のなかの一派に終わってしまっていた可能性があります。

パウロはユダヤ人でない人たち（異邦人）のところへ行って一生懸命にイエス・キリストをのべ伝えました。現在のトルコ、シリア、ギリシアがある地域を股にかけて伝道し、世界宗教としてのキリスト教の基礎を作ったのです。ですので、キリスト教会ではパウロはイエスに次ぐ重要な人物として尊敬され、彼の偉業が誇らしげに語り継がれてきています。

しかし今から約２０００年前、パウロが生きた当時は、彼に対する評価は一様ではありませんでした。パウロが書き残した手紙から分かることは、友人、支援者がいたと同時に、多くの敵対者、迫害者も存在した、ということです。そして、教会における諸問題もありました。そのため、彼はたいへん苦労し、自分のやっていること、やってきたことは無駄ではなかったのか、と落胆することがありました。涙ながらに教会の人びとに訴えることもありました。「私が御言葉を語り、伝道を行ったことはあなたたちを愛していたからであって、それなのにどうしてその私があなたたちの敵になるのですか」、と（コリントの信徒への手紙二12章15節より敷衍的に解釈）。さらには、牢獄に入れられていたとき、いっそうのことこの世を去り、天上のキリストと共にいることを望むという自殺願望とも思われる心の内を告白しています（フィリピの信徒への手紙１章23節より）。偉大な伝道者、神学者であったパウロの赤裸々な姿です。

律法なしの救い

なぜパウロは大変苦労したのか、なぜ迫害されたのか。ひと言で言うと律法なしの救いを宣教したからです。今までにない、ユダヤ教では「場違い」な主張であります。というのも、ユダヤ人にとって律法を守るということは彼らのアイデンティティに関わるもので、決して譲れない事柄です（律法を守ることで民族的な存在意義を確保・維持）。しかしユダヤ教徒であったパウロは復活のイエスに出会い、それ以降、律法なしの救いをのべ伝えていきました。ユダヤ人でない人は、つまり、異邦人はそのままで、律法を守ってユダヤ人にならなくても、そのままで救いに与ることができる、というメッセージを復活のイエスとの出会いを通して与えられていったのです。

律法ってなんでしょうか。規則、ルール、神の啓示・御旨、ユダヤ人がユダヤ人であることの証、アイデンティティです。たとえば、私たちは、自分が自分であることをどうやって示すでしょうか。運転免許・パスポート・健康保険などのＩＤカードです。あるいは、学生証や社員証などの身分証明書です。ユダヤ人にとって身分証明書が律法（トーラー）であり、それを守ることであったのです。その身分とは「神の民」として救われるグループに入っているという身分であり、そのグループのメンバー（会員）であるということ。それを証明してくれるのが律法であり、それを守る、ということがその証明の実質化であったわけです。それをパウロは相対化した。律法を守っても守らなくても「神の民」という救いのグループに属することができる、と主張した。信仰による救い、律法なしの救いと言われる主張です。

これは大変なことですね。ＩＤカードや身分証がなくてもＯＫということです。極端に表現すれば、パスポートがなくても世界中自由自在に旅行できる、という感じでしょうか。旅行したいという気持ちさえあれば、その思いさえあれば許される、ということです。これは、そこにある人間の社会常識から見ると破廉恥なことです。

当然、ユダヤ人は反発します。またユダヤ人キリスト者（ユダヤ人でキリスト信仰をもつ者）も反発します。もちろん、ユダヤ人全員がパウロに反対したわけではなく、彼の福音理解に賛同し、彼をサポート、援助したユダヤ人たちもいました。しかし、大半のユダヤ人は、たとえキリストを救い主と信じることになっても、律法をないがしろにしてはいけないと考えた。自分たちのＩＤカードは捨てることはできない、と。他方、ユダヤ人でない人、つまり、異邦人キリスト者はＩＤカードなしでグループに入れるわけですから喜びます。気持ちさえあれば、信仰さえあればメンバーになれるのです。彼ら、彼女らはパウロの福音理解を受け入れ、教会に集うようになっていったのです。

パウロの時代は、民族宗教であるユダヤ教から世界宗教、普遍宗教であるキリスト教へと生まれ変わっていく産みの苦しみの時期であったと言えるでしょう。実は、ユダヤ人からの反発だけでなく、パウロの福音を喜んで受け入れた異邦人のキリスト者たちは、のちにいろいろと諸問題を引き起こし、彼を大変困らせ、悲しませます。ただ、パウロはへこたれず、希望をもって宣教の業を進めていく。そして、彼に続く世代もキリスト教宣教を敢行していき、現在のキリスト教があるのです。彼らのお陰で、私たちは、国籍、人種に関係なくキリスト信仰をもつことができているのです。

パウロの信念

パウロは大変苦労し、常に敵対者から苛（さいな）まれ、苦しい胸の内を告白するまで追いつめられた。にもかかわらず、なぜ、伝道をやめなかったのでしょうか。彼を宣教へと追い立てていったものは何だったのでしょうか。実は、彼は以前キリスト教徒を迫害していました。そして、突然に復活のイエスと出会い、１８０度の人生の大転回をしてその後はキリスト教を宣教するようになったのです。これについてはいろいろと解説されますが、この経験を通してパウロは以前には全く想像できなかった何かを発見したと思われます。ひと言で表現すると、「神の愛」です。陳腐な言葉かもしれませが、彼はこの「神の愛」に基づいて逆境にへこたれることなく突き進むことができた。

今日の聖書箇所の最後の節を見てください。ローマの信徒への手紙５章５節です。「希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」とあります。その神の愛とはどういう愛なのかを次の６節から11節で説明をしています。

> 実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。
> （ローマの信徒への手紙５章６―11節）

これによると、神はキリストの十字架の死を通してわたしたちを赦し、和解してくれた。そのわたしたちはまだ信仰をもたず、神と敵対していたにもかかわらず、神はわたしたちを愛してくれていたのです。この「神の愛」は今までにはなかったもので、キリストの十字架と復活という最初で最後の一回きりの出来事において示されたのです。パウロは更にこの「神の愛」について触れています。

> だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。
> 「わたしたちは、あなたのために
> 　一日中死にさらされ、
> 屠られる羊のように見られている」
> と書いてあるとおりです。しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。（ローマの信徒への手紙８章35―39節）
> 彼の「思いの丈」を告白しているかのような内容です。

あらゆる勢力、ちから、存在、どのようなものが一斉にかかってきても、主イエス・キリストによって示された「神の愛」から私たちを引き離すことはできない、と。これはすごい言葉ですね。これはまさにパウロの信仰告白です。一日中死にさらされ、屠（ほふ）られる羊のような逆境にあったとしても、何も恐れることはなく、いや、むしろ、私たちはすべてのことにおいて勝利を収めている、と。絶大な神の愛が私たちに注がれている。そのことを身をもってパウロは体験してきている。それに裏打ちされた、ある種の「凄み」がある言葉です。

与えられた場所で咲く花

先日、ヨハネによる福音書の注解書を読んでいた時（ブルトマン『ヨハネ福音書』２９６頁他）、このような「問い」に出会いました。「良き羊飼い」（ヨハネによる福音書10章７―18節）の解説をしているところだったのですが、「神が自分のために存在するということは自分にとって真剣なことなのか」、「本当に自分のために存在する自分の神として神を欲

しているのか」、と。
　偶像の神ではなく、ご利益の神でもない。羊のために命を投げ打つ羊飼いとしての神、その神を自分の神として本当に欲しているのか。私たちの罪のために命を投げ打った主イエスは復活されました。私たちの初穂として永遠の命を得たのです。この御業を行った神を私たちは自分の神として本当に欲しているのか。
　この注解書を読みながら、いや、むしろ私たちは自分の願望をいつも欲しているのであって、その「神」を本当には欲してはいないのではないか、と愕然としました。
　私たちの日常にはさまざまな問題があります。人間関係に起因することが多く、その悩みは複雑でしょう。そのなかで、自分の思いをどうしても欲します。こうあって欲しいという願望を抑えることができません。しかしこの思いが強いために、場合によっては、知らずと他人を裁いたり、逆に自己嫌悪に陥ったりします。私たち人間の自然な姿であり、クリスチャンといわれる人たちも同様に経験することです。
　渡辺和子さんが『愛することは許されること―聖書からの贈りもの』（ＰＨＰ研究所　１９９３年）という本のなかで人間の弱さ・愚かさのなかでどのように生きていけばよいのか、その道しるべをご本人の経験を交えながら綴っています。渡辺さんはカトリックのシスターで、ノートルダム清心学園理事長の任を長く務められています。85歳という高齢にもかかわらず、キリストに生きるとはどういうことなのか、今もなお、精力的に説き明かしてくださっています。
　インターネット上でも、シスター渡辺のメッセージを聴くことができます。そのお話のなかで、「私たちは、ある場所に種をまかれ、芽を出し、成長する花であり、その与えられた場所でしっかりと花を咲かせなさい」ということをおっしゃっていました。隣に咲いている花が自分よりきれいに思えても、自分はその花になることはできない。今いる場所が嫌だからといって別の場所に移動することはできない。激しい雨や風、苦難が降りかかって来ても、与えられたその場で動かず、しっかりと精一杯、咲き誇ることが神様の御旨なのです、と。
　悪人にも善人にも神様は太陽を昇らせ、恵みの雨を降らせてくださいます（マタイによる福音書５章45節）。キリスト信仰をもつ者は、自分も他人もこの絶大な「神の愛」によって赦され、生かされている存在であることを知っています。しかし、それを忘れるとき、人を憎み、怒り、落胆し、絶望し、自分のことさえも嫌いになってしまいます。そして、人生の意味が分からなくなることもあるでしょう。しかし、パウロは語っています。私たちは絶望するために生きているのではない、自分の人生を呪うために生きているのではない、と。
　先ほどご紹介しました聖書箇所ローマの信徒への手紙５章３節から５節では、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを、私たちは知っている。そして希望は欺くことは決してない、と記されています。苦難→忍耐→練達→希望です。私はこれを「希望への連鎖」と呼びたいと思います。そして、そのような連鎖が生じ得るのは、主イエスの十字架と復活において示された絶大な神の愛が私たちに注がれているからです。その神の愛を求めていなさい、と。
　私たちの限られた人生・場所・人間関係、それがまさに私たちが活躍する場所であり、多様な人生模様が描かれるキャンバスであり、その日常から決して逃げることはできないのです。パウロは神が与えた場所で、どのような艱難があろうとも信仰をもって生き抜きました。私たちも「神の愛」を信じ、希望への連鎖をもって新しい年も歩んでいきたいと思います。

2013年1月9日　京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録